

Title	ラーヤ・ドゥナイエフスカヤ マルクス主義と自由：一七七六年から今日まで
Sub Title	Raya Dunayevskaya; Marxism and freedom : from 1776 until today
Author	野地, 洋行
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1960
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.4 (1960. 4) ,p.406(100)- 411(105)
JaLC DOI	10.14991/001.19600401-0096
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19600401-0096">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19600401-0096</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

- (1) G. D. H. コール「英国労働運動史」邦訳(Ⅲ)二二九頁(岩波現代叢書)。
- (2) 拙著「イギリス労働運動の生成」二五五頁。
- (3) ハーディは日本にも立ちより、幸徳秋水、片山潜、西川光二郎等と会見し、神田錦輝館で演説を試みた(吉川守陽著「荆逆星霜史——日本社会主義運動側面史——」一四九—一五〇頁)。
- (4) William Stewart; J. Keir Hardie, A Biography, 1921, pp. 332~333.

——一九六〇・二・二五——  
(飯田 鼎)

ラーヤ・ドウナイエフスカヤ

『マルクス主義と自由』

……一七七六年から今日まで』

Raya Dunayevskaya;

Marxism and Freedom

……from 1776 until today

(一)

自由という言葉は抽象的に理解しようとするとき、われわれは一体いかなる意味の自由について語っているのか、殆んど整理のつか

ことは明らかであると思われるが、それに対して、社会主義国であるソ連においては、完全な意味での自由があるかといえば、右の成熟した西欧的個人主義的自由論の目からみれば否定的な答えが予想される。この著作は、自由に関するこの分裂した二つの視点の間に生れたものであって、著者の態度は基本的にヘーゲル・マルクス・レーニンの線に沿って出発しながらスターリン以降のソ連を自由の抑圧者、国家資本主義ときめつけて容認せず、だがアメリカ資本主義に対しても終始マルクス・レーニン主義者としての批判の手をゆるめてはいない。

このようにみてくると明らかのように、著者の立場は特定の国、または政党を支持していないという意味で抽象的であり、哲学的であり、更にいえば、著者はマルクス・レーニンとスターリン以後とを切り離すことによって自己の正統を主張する亡命者のマルクス主義の一人である。このような立場は著者ドウナイエフスカヤ女史の経歴による所が多いようにみうけられる。トロツキーの秘書であった彼女は第二次大戦に際し、ソ連は労働者の国であるから防衛されるべきだ、と主張するトロツキーに対して、それが、国家資本主義国であるという主張の故に彼と袂別したのである。しばしば著者はトロツキーを官僚主義者として非難するにもかかわらず、トロツキーの永久革命論の影響は彼女の上に覆うべくもなく著しい。好んでレーニンの世界革命を期待する言葉を引用するものそのあらわれであると思われる(たとえば二〇四頁及び二四二頁)。

書 評

ない困惑の中に立っているのがつく。だがこのような概念的な規定から離れて、一体われわれは現在自由であるのかないのか、という風の問題をおきかえてみると、われわれはかなり明確に現代における自由の問題の意味を知ることができる。つまり、現代には異なった「自由」を主張する二つの世界が存在するのであって、われわれは好むと好まざるとにかかわらずこの二つの自由の谷間におかれていますのである。いうまでもなくその一つは自我の主張、個性の發揮などの、いわゆる市民的自由を至上の内容として主張する西欧的な自由論の系譜であり、他は必然性の洞察の中に自由をみ、あらゆる自由を社会發展の法則性との関連においてのみ考えるヘーゲル・マルクス・エンゲルスの自由論の系譜である。だが今やこれら二つの自由論は互いに無関係に切り離された対立物ではなく、互いに他を考慮することなしには存立しえないほど深い関係をもつに至っている。西欧的自由論は、その主張する自由が成立するための経済的条件に対して無関心ではありえなくなっているし(多元的国家観から階級的國家観へ發展の姿勢をみせざるをえなかったラスキをみよ)、また、資本主義的搾取機構の打倒をめざすいかなるマルクス主義者も、近代社会がもたらした市民的自由の諸内容を無視する訳にはいかなないのである。ここに自由に関する論争の現実的根拠があるのであって、自由の問題は単なる概念の問題ではなく、具体的な社会の問題なのである。われわれが住んでいる資本主義社会が、われわれに対して抽象的な、言葉の上だけの自由しか与えていない

この著作が、「マルクス主義と自由」という標題をつけられたゆえんは、著者が、マルクス主義を根本的にその哲学においてとらえ、マルクス主義の歴史を自由への闘争の歴史として理解し、さらに詳細にいえば、人間の自由を「労働の疎外」からの解放として把握しているからにはかならない。したがって、一世紀をこえるマルクス主義の歴史は、人間を労働疎外から解放するための闘争の歴史として考えられている。このようなマルクス主義の哲学的理解は、この著作の長所とともに短所を形成している。すなわち疎外論を、マルクスの「経済学・哲学手稿」における「労働の疎外」を中心として理解し、疎外を所有や、抽象的な人間疎外においてみないで、直接に生産の場で考察したために、それによって著者はマルクスの、哲学から経済学への道の理解に接近することができた。「著者は、しかしながら、単に「労働の疎外」についてのべているだけで「手稿」にいう四つの疎外、労働生産物、労働、人間、の疎外について詳しい考慮をしていない。第三章五三(一六六頁)このような疎外の理解はマルクスの「手稿」から「資本論」への發展過程の理解に一つの光りを投げかけているが、他方、著者は「労働の疎外」という哲学的概念が、マルクスの経済学の中に發展的に解消されるとはみないで、マルクス以後のあらゆる労働階級運動の前面におかれるべきヒューマニズム・哲学であるべきだと考えるとき、それはこの著作の重大な欠陥となつてあらわれる。

すなわち、具体的な生産関係の中で労働をみないで、抽象的、哲

学的な「労働疎外」の概念によって現代の労働をみたために、アメリカ労働者も、ソ連の労働者も、ともに労働疎外におかれていることとなり、独占資本家と、社会主義プランナーは同一視され、ソ連をアメリカと同様国家資本主義国として規定することになった。著者にとっては労働の疎外という一般的现象が存在するだけであって、階級間の諸関係も具体的に分析されることなく、革命はいたるところに起らねばならないが、そのための具体的条件は考慮されていない。つまり、この著書の意味は前半、マルクス主義において自由はどのようなものとして把握され深化されたか、という問題を追究している部分にあり、(第三部殊に三・五・六・七の四章)マルクス以降の後半は、支持されるべき現実的基盤をもたない亡命マルクシストにふさわしく、哲学的な労働疎外の概念に固執し、抽象的な「大衆」を崇拜してアメリカ資本主義に対する批判のほかは取る所は少ない。以上が本書の概観である。以下少しく本書の積極的主張に立ち入ってみよう。

## (一)

本書は大別して次の七つの部分から成立している。

## 緒論

第一部 実践から理論へ、一七七六年から一八四八年まで

第二部 歴史の転換期における労働者と知識人、一八四八年から一八六一年まで

第三部 マルクス主義、理論と実践の統一

組織の間奏曲

第四部 第一次世界大戦とマルクス主義の大分裂

第五部 現代の問題、自由対国家資本主義

以上は大ざっぱな分割であるが、第一部においてはマルクス主義の成立の前提となつていゝ産業上・政治上・哲学上・経済学上の諸革命が論ぜられ、更に、マルクス初期の「手稿」が人間の自由のため、新しいヒューマニズムとして論じられている。第二部は労働者と知識人と国家の関係がのべられ、労働大衆の果す根本的役割が強調される。第三部はこの著書でもっとも興味ある部分であり、著者がその自由論の中心において「労働の疎外」の概念が、マルクスにおいて、いかに経済学にまで高められているかをマルクスの資本論の内容に立ち入りながら考察されている。しかも、この哲学から経済学への発展(もっとも著者はマルクシズムを根本的にその哲学においてとらえるのであるから、これをわれわれのいう意味で発展として考えているかどうかは疑わしい)は、単にマルクスの頭脳の中だけで起つたのではなく、南北戦争や、パリ・コムミュンなどの労働者運動における事実の具体的継起を背景としていゝのであつて、マルクスがこれらの歴史的事実を労働者の立場から積極的理論の中に吸収していったからこそ、現在の形の資本論が成立したのだと主張している。そして叙述もまた事実から理論へという形式

がとられているのが独創的であり、興味深い。著者独特のこの理論態度が失われるときには叙述もまた単なる資本論の要約に墮してゐる。

間奏曲においては第二インターナショナルが取り上げられ、その主導勢力であるドイツ社会民主党理論の誤りが鋭く追究される。第四部では第二インターの崩壊と、レーニンのドイツ民主社会党的マルクシズムからの訣別、いわゆるマルクシズムの分裂をとり上げ著者は明確にレーニンの態度をドイツ・マルクシズムに対して正しいものと規定している。著者によればレーニンがかかる正しい理論的把握をすることができたのは、第一に彼が一九〇二年から一九〇五年にかけてマルクス主義の哲学——弁証法を正しく研究したからであると同時に、第二に理論を単に知識人の頭の中だけで発展させず、*「理性としての大衆が、すなわち労働者の立場に忠実に参与する」というマルクスの実践的態度を学んだからにはかならない*。第四部では、さらにこのレーニンの正しい態度によって指導された革命と組織の問題が具体的に分析されている。第五部は、すでにのべたように著者の亡命マルクシストとしての性格を著しく反映してかなり政治的になっており、レーニン以後のソ連を自由を抑圧する「国家資本主義」として規定するに至っている。ソ連において官僚主義がどのような欠陥を露わしているにしても、このような概念的混乱は著者が新中国の分析を怠っていることと共にこの著の意味を低めているように思われる。「ナポレオンがサン・キュロットに似ていな

いように、スターリンや新インターゲンチャは一九一七年の革命を起した人々には似ていない」(二二四頁)という表現は、比喩としては面白いにしても、決して事実を客観的に把握したことにならないであろう。

## (二)

すでにくり返したように、人間の本質を労働においてとらえる弁証法的唯物論者にふさわしく、著者は自由を「労働の疎外」からの解放の問題として一貫して考えている。この立場は明らかに哲学的である。自由を抽象的に「束縛のない状態」と考え、労働しないこと、享樂のための余暇を獲得することと考える「無前提的」(ドイツ・イデオロギー)観念的な自由論に対して、労働の廃止ではなく労働の解放に人間自由を求めた著者の態度(六〇頁)は基本的に正しいものといえよう。だが、マルクスが、具体的な生産関係の分析によって労働疎外のメカニズムにまでつき進んでゆく時、著者はこの思弁的、哲学的時点において立止まる。著者がくりかえしてヘーゲル哲学の再評価を要求するのも決して偶然ではない。しかもヘーゲルは弁証法論者としてではなく、哲学者として再評価されねばならないというのである。ヘーゲル弁証法の極点にある絶対精神、神人はマルクシズムの解放の極点となるべき「完全な自由人」と等置されている(三九頁)。私見によれば、著者自身正しく評価しているように、マルクスが経済学を人間解放の科学にすることが

できたのは(一〇六頁)、彼がヒューマニズムを科学にまで高めたからである。その意味ですべての科学はヒューマニズムに基礎をおかねばならないとしても、逆にまたマルクス主義ヒューマニズムは科学的であらねばならないのである。この点における著者の弱点は、マルクスが哲学を経済学にまで、自由のヒューマニズムを自由の科学にまで高めたその時点で立止まり、それ以後の、科学的分析を怠った所からきている。著者は科学がヒューマニズムであるべきことを主張するのに急でマルクス主義ヒューマニズムが科学ときりなせないものであることを忘れておられるようにみえる。したがって著者の目には、支配—隷属という図式の中でアメリカの独占資本家も、ソ連の計画指導者も同じものとして現れる。

以上、著者が、マルクス主義者として、自由の問題を「労働の疎外」からの人間解放として理解しながら、それを基本的に哲学の問題として考えたために、労働疎外の概念は抽象化され、一般化され、疎外のメカニズムの分析にまで高められることができず、アメリカにもソ連にもひとしく労働疎外を見出す亡命者のマルクス主義自由論となる経路を要約したが、他方、この書独自のすぐれた点をも評価しなければならぬであろう。それはこの著者の著述方法にも関することだが、理論の形成、深化が、つねに実践に根ざすものとして正しく把握されていることである。著者は、現実から離れた理論の発展を誤ったものとして否認し、正しいマルクス主義的認識、理論は必ず事実に対する弁証法的な考察の中から、とくに「理

性としての大衆」(一九〇頁)への信頼によって深化されると確信している。「大衆」と「弁証法哲学」はこの書を貫く二本の柱である。著者のいう「実践」は必ずしも人間の主体的な現実参加ではなく、むしろ労働大衆への絶対的信頼にもとづいた大衆の行動の単なる「事実」の観念に近く、その限り、理論の積極性が弱まり、ある場合には大衆物神の感さえ抱かせるが、現実認識を理論の出発点とする点では、基本的に正しい態度であるといえよう。たとえばアメリカの南北戦争や、パリ・コムミュンが・マルクスの資本論構成に對して、いかに大きな影響を与え彼の経済学を深化させたかという分析は、著者の功績の一つであろう。資本論における物神性の把握は、パリ・コムミュンの経験ののち、はじめて明確にされたと著者はのべている(九九頁)。

さらに、現代アメリカにおけるオートメーション化が、いかに労働を疎外し、したがって人間を自由から遠ざけているか、という点に関する著者の分析も鋭い。人間の自由を労働しないこととして理解し、生産力を高めて享楽のための時間を増大させることを自由の増大と考える卑俗なマルクス主義的自由論に對し、オートメーション化の現実が、人間の労働を大幅に軽減させることを可能にしたがら、しかも労働者のために余暇を作り出すどころか、彼らを失業に追いやり、ますます労働を苦しみにし、労働時間を加重し、自由を労働者の手から奪いとるものであることを明らかにしている。

マルクス主義をヒューマニズムとして、あるいは自由の問題にお

いて、再検討しようとする動きは最近フランスを中心として活潑になり、それと関連して初期マルクスの研究も盛んになってきたが、このような動きの起る条件は現代のような世界状態の中に十分存在しているのである。だが、われわれは何よりもまず、マルクス主義はヒューマニズムであり、自由の思想であるとしても、それは根本

的に科学——経済学——ときりはなすことのできないものであることを銘記すべきだと考える。もしマルクス主義に関して、科学はヒューマニズムであるべきだといわれるならば、ヒューマニズムは科学であらねばならないと答えるであろう。

(野地 洋行)